

マリ・パップ＝カルパンティエとその思想

金山 富美

はじめに

マリ・パップ＝カルパンティエは『著名女性事典』で次のように紹介されている。

「フランスの教育者 (1815年-1878年)。ごく若くして保育所見習いとしてその道に入り、すぐれた能力を発揮する。[中略] 1848年、パリに設立された保育師範学校の校長となり、その後、保育所総視学官の任に就き、幼児教育において卓越した役割を果たす。[中略] 多くの著作を発表。『保育学校での実践教育』『子供のための博物・事物の話』などがある」¹

このように、パップ＝カルパンティエはフランスの保育史を語るうえで忘れてはならない人物といえる²。また、その名は通りに冠されて今も残り、この女性がいかに広く知られていたかを彷彿とさせる³が、実際に19世紀ヨーロッパでは、ペスタロッチやフレーベルと肩を並べるほどであった。

しかし、令名高く、それぞれに「初等教育の父」「幼児教育の父」と聞こえて今日に至る二人の男性教育(思想)家に比して、現在、パップ＝カルパンティエが顧みられることの寡少さは、その存在が忘却の彼方に葬られたことと等しい。こうして、括弧付きの敬意により「幼稚園の優しいお祖母さま」という姿に矮小化され、評価が十分には与えられてこなかったこの女性を惜しみ、コスニエは近年、彼女の評伝を著している⁴。

今日と異なり19世紀フランスでは、保育及び初等教育の確立は、国家の将来の根幹をなす重要な政策のひとつであった。本論文ではまず、この公教育の発

1 Lucienne MAZENOD, Ghislaine SCHOELLER, eds., *Dictionnaire des femmes célèbres*, Robert Laffont, 1992, p.669.

2 ただし、この人物に特に焦点をあてた研究は多いとはいえない。わが国でも「パプ・カルパンティエの母親学校(保育所)論—第二共和制期までの著作を中心に」(藤井穂高、『フランス教育学会紀要 創刊号』, 1989)以外では、むしろ保育史全般の流れの中で触れられることの方が多い。参考文献として他に『フランス保育史制度史研究—初等教育としての保育の理論構造—』(藤井穂高、東信堂、1997)を挙げておく。

3 パリ6区にある Rue Marie Pape-Carpantier。20世紀以前に生きた女性の名が公共物に添えられたという状況は、稀にしか見られない。

4 Colette COSNIER, *Marie Pape-Carpantier — Fondatrice de l'école maternelle —*, Fayard, 2004。なお、この評伝は同著者の *Marie Pape-Carpantier — de l'école maternelle à l'école des filles —* (L'Harmattan, 1993) を加筆改訂したものである。

展にバップ=カルバンティエがいかに重要な役割を果たしたかということについて概観する。さらに、教育現場での改革に傾けた情熱に劣らず、彼女が人生を賭けたその精力的な執筆活動にも目を向け、バップ=カルバンティエの教育観を問うてみたいと考える。そこには、いわゆる幼児・初等教育の枠にとどまらない教育思想、あるいは学校教育という分野を超えた思想が垣間見られるのではなかろうか。

1. 保育学校の成立とバップ=カルバンティエ

日仏の教育制度が異なることは知られているが、われわれがあまり注意を払わずに違いを見落としてしまうのは、特に幼児教育の領域ではないだろうか。école maternelle が仏和辞典で便宜上「保育所、幼稚園」と訳出されているためでもあろうが、混乱を招く。

わが国において保育所は社会福祉施設であり、幼稚園の方は学校に属する。一方、フランスのécole maternelleは、受け入れ年齢からすれば、2才以上の子供を対象とすることから日本の保育所に相当する。が、écoleの示すとおりの「学校」であるという意味では、日本の幼稚園にあたるということになる。後に小学校を控えた就学前教育であって、すでに初等教育に含まれるわけなのだ。したがって、ここでは双方の意味合いを考慮してécole maternelleに「保育学校」の訳を与えて⁵、先を進めることとしたい⁶。

次頁の年表で示すように、この保育学校は、もともと(慈善)保育所salle d'asile⁷と呼ばれていたものを1879年に名称変更して今日に至っている。現在の名称は、無償そして非宗教の義務教育確立で名高い文相ジュール・フェリーの委員会が採択した。しかし、より正確に言えば、保育学校という呼称が初めて公に使用されたのはさらに30年遡る1848年、文相イポリット・カルノーの省令によるものだった。カルノーの政策はわずか一年の短命に終わるが、当時の

5 この訳語については「保育学校教師の資質に関する歴史的考察」(赤星まゆみ、『フランス教育学会紀要 創刊号』、1989)のpp.38-39も参考にした。

6 なお、保育学校は義務教育ではないものの、現在では2才以上の子供のほぼ100%が通っている。これ以外に3才以下の幼児対象のcrècheという施設もあり、こちらはいわゆる託児(または保育)所にあたる。フランスと比較して、わが国は社会(教育)制度として保育の位置づけが弱く、このことが母親となった女性の社会的位置づけを制限しているとも考えられよう。

7 当初預けられていたのが、庶民の中でも労働者、貧困家庭の子供がほとんどであったために、慈善託児所と訳す方が適切な場合もある。

高等教育委員会にécole maternelleという新名称を示唆した人物、つまり真の名づけ親こそ、バップ=カルバンティエその人だったのである。保育学校という、様々な社会階層の子供の学び舎を想起させるこの名称がようやく陽の目を見ることになった1879年は、奇しくも、バップ=カルバンティエが不遇のうちにこの世を去った翌年のことになる。

バップ=カルバンティエ関連年表(保育・女性教育史の流れとともに)⁸

☆はマリ・バップ=カルバンティエに関する事項

復古王政期 Ⅱ

- 1815年 ☆サルトル県ラ・フレーシュにマリ・カルバンティエ誕生
- 1826年 ・エミリ・マレがパリ初の保育所を開設
・ジャン=ドゥニ・コシャンがパリに2番目の(慈善)保育所を開設
- 1833年 ・ギゾー法:初等教育の本格的整備(各市町村に男子校開設)
・コシャン『保育所という子供の最初の学校の設立者と教員の手引書』を公表
- 1834年 ☆マリ・カルバンティエ、母と共にラ・フレーシュ初の保育所を任される
- 1836年 ・ブレ法:女子小学校開設の法令化(市町村の随意)
- 1837年 ・(慈善)保育所組織勅令(保育所に関する初の勅令)
- 1842年 ☆ル・マン保育所所長に任命される
- 1846年 ☆『保育所指導指針』を公表
- 1847年 ☆文相サルヴァンディにフランス初唯一の保育士養成所所長に任命される

第二共和制期 Ⅱ

- 1848年 ・文相カルノー、保育所を公教育施設とし、その名称を(慈善)保育所salle d'asileから保育学校école maternelleへと変更する旨宣言。初等教育法案:初等教育施設に「保育学校と呼ばれる幼児教育機関」を含むことが明記される
☆保育師範学校(前年の保育士養成所を継承)校長に任命される

8 本年表をまとめるにあたって使用した主な参考文献は以下のとおり:コスニエによる評伝(注4参照); Ferdinand BUISSON, *Nouveau Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, Hachette, 1911; Yves GALUPEAU, *La France à l'école*, Gallimard, 1992; Françoise et Claude LIEVRE, *Histoire de la scolarisation des filles*, Nathan, 1991; Georges DUBY, Michelle PERROT, eds., *Histoire des femmes en Occident*, Plon, 2002; 梅根悟/ほか著『世界教育史大系-フランス教育史』vol. 9-10、講談社、1975年; 岩崎次男/ほか著『世界教育史大系-幼児教育史』vol. 21; 川野辺敏/ほか著『世界教育史大系-女性教育史』vol. 34、講談社、1977年。

- 1849年 ☆『保育学校での実践教育』発表。婚姻により姓をバップ＝カルバンティエに
 ☆指導学生8名全員が保育教員免許取得試験に合格
 ・新文相ファルーがカルノー法案棄却。保育学校はその名を再び保育所に
- 1850年 ・ファルー法：住民800人以上の市町村（財源でまかなえる場合）に女子小学校を最低1校設置する義務
 ☆『保育所用新綴字教本』『保育所用新綴字指導』等を発表

第二帝政期 ㊦

- 1852年 ・保育師範学校の名称が保育士養成所に変更（格下げ）される
 1855年 ☆フレーベル教育法（マレンホルツ夫人により紹介）をフランスで適用
 1858年 ☆『子供のための博物・事物の話』を発表
 1863年 ☆『砂粒の秘密あるいは自然の幾何学』を発表
 1864年 ・文相ヴィクトル・デュルイの特別中等教育プログラム構想
 1866年 ☆『学校同盟』執筆に着手
 1867年 ・デュルイ初等教育法：住民500人以上の市町村すべてに女子小学校最低1校の設置義務
 ☆デュルイの依頼により、万国博覧会開催にあたりソルボンヌで教育講演会講師を勤める（8月21日－9月19日まで5回の講演）
 ・デュルイ、女子中等教育課程法起案（10月30日通達）：中等教育公開講座の開設、ソルボンヌ連合の結成
- 1868年 ☆ソルボンヌ連合教師団メンバー（唯一の女性）に、また保育所総視学官に任命される（1874年まで）。『初等教育における保育教育入門講義講演記録』刊行
- 1869年 ☆『野生の動物』、『地理学、博物学、最初の基礎知識』（地理・博物学者と共著）、『動物学－視覚の教育－』等を発表
- 1870年 ☆『教師の手引』『女性教師の手引』等を発表

第三共和制期 ㊦

- 1872年 ☆『文法、読みと書取り練習問題』（言語学者と共著）、『家畜の話』、『学校同盟』等を発表
- 1873年 ☆『新しい形（保育所、小学校、家庭向）／視覚の教育』『麦物語』を発表
- 1874年 ☆マクマオンの文相ド・キュモンにより保育所総視学官を解任される
- 1876年 ☆『博物誌』を発表
- 1878年 ☆『感覚教育と教育器材についての覚え書き』を発表
 ★7月31日死去
- 1879年 ・文相ジュール・フェリー率いる委員会（メンバーの一人に保育所総視学官ケルゴマール）が保育所 *salle d'asile* を保育学校 *école maternelle* に名称変更

- 1880年 ・カミーユ・セー法：女子中等教育（女子リセ）創設
 1881年 ・フェリー法：初等教育無償法及び初等教員免許法制定、保育学校を「子供の身体的、知的、道徳的発達」を目指す教育施設と定める
 1883年 ・フェリー法：初等教育の義務（無償）化と非宗教化を決定
 1886年 ・初等教育組織法により、保育学校を初等教育に統合する

サルト県出身のマリ・カルバンティエが国家の初等教育制度確立に拘わるようになった最初のきっかけは、ジュール・マレ夫人がル・マンの保育所における彼女の経営と教育の腕前を認め、甥である文相サルヴァンディに強く推薦したことによる。サルヴァンディは、カルバンティエの著作『保育所指導指針』*Conseils sur la direction des salles d'asile* の中に、自身の政策に合う要素を見出した。彼女の指導書は、もっぱら慈善、そして神に代わっての懲罰を掲げて保育に関与してきた聖職者には不審の眼差しを向けられたが、そこに展開された子供に対する愛情と寛大さ、子供の意思の尊重、指導者と子供相互の信頼関係を軸とする保育論は、文相にとどまらず、『レ・ミゼラブル』を構想中であつたヴィクトル・ユゴーの関心をもひく新しい豊かな内容を備えていた⁹。こうして1847年、カルバンティエはフランスで初めて創設されたこの国唯一の保育士養成所の初代所長に抜擢される。

さらに翌年、第二共和制の発足時、カルバンティエは新文相カルノーの初等教育法案を現実的な部分で支える。カルノーは大革命の折に国民公会の議長を務めた大カルノーの次男である。彼がこの時、保育分野の実力者であるマレ夫人の反対を押し切ってまで保育所 *salle d'asile* の名を変えたかった理由は、何よりもそこに貧困と施しが連想されるからだった。実際に名は体を現す。それまでの保育所はもっぱら貧しい労働者階級の子供を対象とし、中身としても彼らを保護する程度にとどまるもので、修道女によって安易な形で維持される施設が少なくなかった。文相は新しい共和国の名のもと、保育所名称変更の必要性を感じ、同時にそこを、民衆を「無知と虚偽から護り」「刷新する」（1848年3月6日通達）ための最初の教育の場へ変貌させたいと望んだ。そして保育学校から始まる初等教育の義務（無償）化、非宗教化を目指したのである。

新しい名称、保育学校 *école maternelle* の *maternelle* という部分には「幼児教育には母親的なものが不可欠である」という時代性が感じられはするもの

9 Emile GOSSOT, *Madame Marie Pape-Carpantier, sa vie et son œuvre*, Hachette, 1890, p.51.

の、以降、それは2才から6才の子供に小学校の準備段階となる学びを可能にしながら幼児に必要な保護も行う、共和主義的初等教育第一段階の学び舎として機能していく。同年、保育士養成所も保育師範学校とその名を新たにし、カルバンティエが校長に就任した。

もっとも、それから数カ月もたたないうちに、カルノーは教会主流派とブルジョワ保守派が結束した議会によって辞任を余儀なくされる。「理想としての教育形態は、その輪郭ができるや、反発を引き起こしたのである」¹⁰。半年の間に、公教育省大臣の首はさらに三つすげかえられ、その後ようやく文相に落ちついたのはフレデリック・ド・ファルーであった。ファルーはカルノー法案を廃案にし、保育学校の名称も「なんといっても貧民は存在するのだから、慈善という性格が忘れられてはならない」という理由から、元の保育所に戻した。しかし実質的内容について退行は見られず、一旦初等教育に統合された保育所は、一方で慈善施設として規定された託児所 *crèche* と区別され、「もっとも基礎的な学校」としてフランス全土に浸透していく¹¹。

2. 保育教員の育成—女性教育者の草分けとして—

この間、カルバンティエは『保育所指導指針』に続き『保育学校での実践教育』を執筆し、多くの教員を啓蒙した。教会、保守派のカルバンティエへの警戒心は増す。というのも、女子教育の必要性さえ十分認識されていないその時代にあつて、国民教育を担う施設の最初の責任者がこの女性で、それが庶民出身であるというのだから。しかも、カルバンティエとやらは自身の著作の中で堂々と、保育学校が保育所へと名称変更されたことに納得しない旨を明言している¹²。ファルー法起草者の有カメンバーであつたティエールは、ブルジョワジー子弟の教育、中等教育の非宗教化には積極的だったが、庶民を対象とする初等教育については、できれば再び聖職者に戻したいという意向さえ抱いていた。

こうした流れの中でカルバンティエを陰で誹謗する者は多かったが、彼女の働きとその実力には文句のつけようがなかった。1849年にソルボンヌで実施された保育教員免許取得試験は口頭試問を含むものであつたが、師範学校で彼女

に育てられた女子学生は見事全員合格した。そして各地へと散らばり、自らの任務を着実に果たしていったのである。しかし、この師範学校も数年後には名称を保育士養成所に戻され、格下げを余儀なくされる。パップ＝カルバンティエはそれを忍辱の袈裟とした。ドイツから導入されたフレーベル法をフランスの教育現場に適用するなど、なお精力的に初等教育基礎の位置づけを押し進めていく。

ところで、当時、修道女が関わる保育施設では、女兒を「おとなしく優しい性格」であるとして好んで受け入れるのと同時に、彼女らをすでに知的身体的に劣る性であるとして知的な学習を避けた（もっとも、修道女自身が指導能力をもたなかったともいえる）。他方、男児の方は「破廉恥な振舞いをし、たえず走り回るゆえ」に入所を拒否されることがままあり、その結果、彼らは非宗教的な公立の保育所に集中した¹³。対して、パップ＝カルバンティエ主導によって増えつつあつた公立保育所は、必要とされる数にはほど遠かつたものの、共学を基本としていた。大勢の児童を受け入れざるをえない場合は男女別の指導もあり、職業や身体に関係する作業（工作、裁縫、積み木遊びなど）では「若干力が弱い女兒」への配慮もされたようだが、その他は男女同等の教育を与えようとしていたことは興味深い。パップ＝カルバンティエはまた、保育所の衛生、環境、設備面でもおおいに知恵を働かせ、施設改善に努めた。

保育士養成所は、教育内容の充実と実績の積み重ねによって、全国から学生が集まるようになった。所長は次々と指導書を執筆し、保育士の知識を広く、また彼女らの意識を深いものへと育むべく努力を惜しまなかったのだ。加えて、おそらくパップ＝カルバンティエの謙虚さ、分け隔てのない姿勢のゆえであろうが、驚くことに、学生の中に修道女の姿さえ見られるようになっていた。修道女には、修道院長発行の服従状 *lettre d'obédience* のみで保育できる特別待遇が与えられていたが、自ら進んで保育教育に必要な知識と姿勢とを学ぼうと望む者もあり、養成所はその思いに応えたのである。

こうして保育から初等教育基礎、また女性指導者養成へと伸びていったパップ＝カルバンティエの関心と探究は、その後、さらにヴィクトル・デュルイと

10 Françoise MAYEUR, *l'Éducation des filles en France au 19^e siècle*, Hachette, 1979, p. 99.

11 藤井『フランス保育史制度史研究』(注2を参照) pp.54-55.

12 PAPE-CARPANTIER, *Enseignement pratique dans les écoles maternelles*, Hachette, 7^e éd., 1881, pp.4-10.

13 Jean-Noël LUC, *Fillettes fragiles, fillettes dociles ? Les paradoxes de la préscolarisation féminine au XIX^e siècle*, in «L'éducation des filles au temps de George Sand», Artois Presses Université, 1998, pp. 78-79.

の出会いを通して、あらゆる初等教育従事者、そして女性一般へと拡がり、彼女の教育活動の射程に取り込む。自由思想家であるデュルイをナポレオン三世が文相に抜擢したのは不思議だが、パップ=カルパンティエは文相に深く信頼され、1867年のパリ万博の際には、ソルボンヌ講堂でヨーロッパ各国から集まった男性を含む初等教育担当者を前に、5回の教育講演をこなした。さらに、文相がいずれは中等教育法案策定につなげようと企画した中等教育特別講座にも、ソルボンヌ連合教師団唯一の女性メンバーとして加わる。

パップ=カルパンティエが男性と並び、女人禁制に等しかったソルボンヌの教壇に立ち、講演で好評を博したこと、錚々たるソルボンヌ連合教師団の紅一点としてその名を連ねたことは、世の女性を勇気づけ、同時に、人々の女性に対する見方を新たにさせたにちがいない。人が自らの枠を超えて成長するためには、典型というものが必要なのだから。デュルイは、パップ=カルパンティエを保育所総視学官に任命する。

デュパルルー率いる聖職者と保守主義者の圧力によって女子中等教育法案は挫折し、1869年にデュルイは文相を辞任するが、10年後の第三共和制期における女子教育の発展は、この礎あってこそのことだった。保育学校は1879年に名称回復、その翌年カミーユ・セー法が女子中等教育創設を、さらに翌年には現代につながる初等教育法をフェリー法が定める。デュルイの政策を裏づけた人物の一人として、パップ=カルパンティエの役割が無視できないことは、もはや自明であろう。初等教育と女子教育とは連動し、彼女はその双方に大きく関わったのだった。

デュルイ失脚でパップ=カルパンティエへの非難は強まった。依然としてブルジョワ社会は貧しい子供を内心軽蔑し、教員の中にさえ彼らに学ばせる必要を感じない者もいた。女性に対しても同じだった。社会階層と性の違いにより、教育機会の差は歴然としている。その状況を覆すべく提言を続けるパップ=カルパンティエは当局にとって目障りな存在でしかなく、彼女は1874年に保育所総視学官を解任されたうえ、無信仰、自由主義者と白眼視された。しかし、そうした不遇の中にも、彼女は文筆による教育活動に勤しんだ。次は、パップ=カルパンティエの著作を通して、彼女の思想を考えたい。

3. 平等の希求と啓蒙活動

パップ=カルパンティエが社会的、文化的に虐げられた人々に、恵まれた人

と同等のチャンスを与えようと望んだことは、当時にあつてはきわめて新しい発想であった。とはいえ、目の前にいる生徒に何をどう教えるのか。親にさえうっちゃられ、会話の仕方もある数の数え方もままならぬ無知な子供たちの幼い心には、すでに迷信が巢食い始めている。多くはそのまま労働者になり、彼ら自身と変わらぬ蒙昧で悲しい子孫を成すだろう。

そこでパップ=カルパンティエが保育を含む教育全般に重視したことは、知育であった。なぜなら人間の人間たる所以は知恵をもつことであり、道徳的規範も「知性を拓く」ことによって形成されると考えたからである。できればそれを早い時期から吸収させたい。その鍵となるのは言葉である。こうしてパップ=カルパンティエは、しばしば「子供が学ぶには難しすぎる」という非難を受けつつも、言葉を楽しく呑み込ませる工夫¹⁴をし、未知の事象をできるだけ明瞭に意識の中に沈澱できるよう意図した教材を次々と編み出していった。1858年の『子供のための博物・事物の話』を初めとした数々の本では、優しく語りかけるような文章がとりわけ魅力的で、自然と子供の関心を引きつける。また、教える側にとってもそれは楽しく、パップ=カルパンティエの教科書は教育現場のみならず一般にも出回り、家庭での読み聞かせや読書にも多く用いられた。

後に英語とロシア語に訳されるほどに広く好評を博したこの『子供のための博物・事物の話』を、ジョルジュ・サンドは次のように絶賛している。

「素晴らしい本です。これで若い女中に読み方を教えています。非常に頭のよい娘なのですが、この本のおかげで、この娘の精神はあらゆる善の観念へと開いています。18才だというのに2才の子供程度にしかものを知らない娘を教えるなどというのは、これまでになく体験でしたが、その娘がこの半年で、子供らしい純真さを保ったまま、その年齢に見合う知性を獲得したのです。毎晩、私たちはマリ・カルパンティエの短いお話を読んでいます。私自身も生徒と同じくらい楽しいのです」¹⁵。

また「目の記憶が精神の記憶を助ける」¹⁶との考えから、パップ=カルパンティエは、繊細で美しい絵も多く挿入した。それは子供の好奇心を刺激し、自

14 たとえば音声模倣法 *phonomimie* もその一つに挙げられる。Cf. 藤井前掲書、p.126.

15 George SAND, *Correspondance*, Garnier, t.XIV, 1978, p.744.

16 PAPE-CARPANTIER, *Manuel de l'instituteur*, 1869-1870, p.107.

ら観察し、考えさせる方向へと促す。さらに、彼女はお話の多くを、教師と生徒、また母親と子供との対話で構成した。以下は『動物学—視覚の教育—』の中の一例である。

<沼沢地の散策>¹⁷

「日暮れになると、沼周辺には小さな青白い火がいくつもゆらめきます。これを農民は鬼火と呼び、恐怖に震え上がります。それは意地悪な魂で、夜になると飛び回って人間を危険な目に合わせる、というのです。農民たちは、夜分遅くに先を急ぐ旅人をこの鬼火が取り囲み、踊りながら行く手を阻み、次第に沼の深みへと誘って行くのだ、と言い張ります。でも、子供たちよ。鬼火と呼ばれるのは地面が発散する蒸気にすぎません（ちょっと前にガスのことを話しましたね。それと同じです）。暑い夏の夜、半分水に浸かった泥から立ち昇り、弱い光を放つのです。するとオーギュストが「でも、鬼火が光る蒸気なら、どうして人についてくるの」とたずねました。そんなこともたまに起こります。なぜなら空気に浮かぶ軽い蒸気だから、人が動き、空気の流れができるとつられて動くのです。[中略] そんな会話をしながら散歩を続けていると、オーギュストが突然叫んで後ろにとびのきました。へびだ！」

鬼火に関する言及は、サンドの田園小説『愛の妖精 *La Petite Fadette*』を思い起こさせる。主人公のファデットという名は「鬼火」「悪戯好きの小鬼」の意味で、その不幸な境遇と貧しさゆえに村びとから疎外され、不吉な娘とみなされている。実際、農民や労働者、またそれ以外にも多くの人々がまだそうした迷信の虜のまま、不幸の芽を育てていた。バップ=カルバンティエは「沼沢地の散策」のエピソードで、鬼火というものは自然の中に現れる、文字どおり自然な科学的事象であることを優しく説いて聞かせる。それは決して知識の詰込みではない。へびについても、人間をたぶらかす「罪深い動物」という思い込みを払拭すべく、興味深い生態について子供の疑問、好奇心に応えるよう述べている。

「子供を最初に導く地図は、彼らが歩む足下の大地でなければなりません。[中略] その後、次第に関心が広がっていけば [中略] いずれ、生徒

に自分の場所と自身の存在の重要性とを示唆しながら、歴史地理学や政治地理学に取り組める機会も訪れるでしょう。」¹⁸

バップ=カルバンティエの初等教育は身近なものから広い世界へと学生を誘い、最終的にはその眼差しを、もっとも遠くて近い、もっとも貴い存在である人間、自己の尊厳（それが他者の尊厳につながる）へと導こうとするもののように思われる。貧しい子供に教育は不要であるどころか、厳しい将来が待っているからなおのこと、その人生に耐えられる精神を鍛えることが、教育の基本であり目的だと考えたのではなかろうか。

また、対話を用いた文章は、指導者と子供相互の信頼関係、意思の疎通という彼女の指導方針を表明するものだが、語りの形式自体も、学ぶ者と学ばせる者との新しい関係の形成に資するものといえよう。さらに、サンドもそう感じたように、バップ=カルバンティエの本は子供のみならず、彼らを導く者をも知らず知らずの間に迷信や無知から解き放つ力をもっているように思われる。

さいごに

『男性教員の手引』と『女性教員の手引』2冊にほぼ同じ内容を用意したバップ=カルバンティエだったが、後者序文で、女性の中に男性とは異なる「自然」を賞賛し、母親としての資質が理想的な初等教育に有用であると述べている¹⁹。われわれはここで、彼女をフェミニストと呼ぶのを若干躊躇する。しかし、これまで眺めてきたバップ=カルバンティエの足跡はそうした理屈を超えて、ひとつの真実を証言している。それは、彼女が男女の平等、人間の平等を求め、それをいち早く現実の教育活動の中で試行したことであり、まさに草の根の運動として社会に定着させようとした格闘の人生である。

「男にとってイヴは何だったの？」—「彼の伴侶で友達です」

「女にとってアダムは何だったの？」—「彼女の伴侶で友達です」

「友達というのは何なの？」—「それは愛しい、互いに尽くしあい、ともに喜びと悲しみを分かち合う人のことです」²⁰

18 注16に同じ。

19 PAPE-CARPANTIER, *Manuel de l'institutrice*, 1869-1870, p.1.

20 PAPE-CARPANTIER, *Enseignement pratique dans les écoles maternelles, ou Premières leçons à donner aux petits enfants*, Hachette, 1849, p.34.

17 PAPE-CARPANTIER, *Zoologie des écoles, des salles d'asile et des familles - Enseignement par les yeux*, Hachette, 1873, pp.63-65.

本論考ではバップ=カルパンティエを概観したに過ぎないが、この人物の歩みの中に、われわれはまだ多くの課題を見出し、新たな問題提起として取り上げることができそうである。それは次の機会に譲ることとしたい。

[Résumé]

**Marie Pape-Carpantier, initiatrice de réformes pédagogiques
suggérant l'égalité hommes-femmes devant l'éducation**

Fumi KANAYAMA

Marie Pape-Carpantier (1815-1878) est qualifiée de «fondatrice de l'école maternelle et pédagogue de très jeunes enfants», mais cette définition est simpliste pour caractériser cette femme pionnière dans le domaine de l'éducation.

Pape-Carpantier inspira assez de confiance à Salvandi, Carnot et particulièrement Duruy, soit trois ministres de l'instruction publique, chacun de trois régimes différents, pour être nommée successivement directrice du Cours normal des salles d'asile, directrice de l'Ecole maternelle normale et enfin inspectrice générale de l'Instruction publique. Ainsi s'efforça-t-elle non seulement de développer les salles d'asile afin que ces garderies améliorées sur son initiative méritent d'être appelées Ecoles maternelles même pour les pauvres, mais encore d'influer sur le système scolaire laïque pour les garçons et surtout pour les filles.

Dans l'Ecole maternelle normale, on trouva bien des religieuses parmi les étudiantes. Et Pape-Carpantier ne cessa de rédiger de nombreux articles, manuels et livres publiés pour un large public. Sa notoriété lui amena l'hostilité de l'Eglise et d'une partie de la population.

Je voudrais explorer sa vie et ses activités aussi bien professionnelles qu'intellectuelles pour dégager ses idées et insister sur la figure «pionnière» de la scolarisation moderne pour tout le monde, sans distinction de sexe.